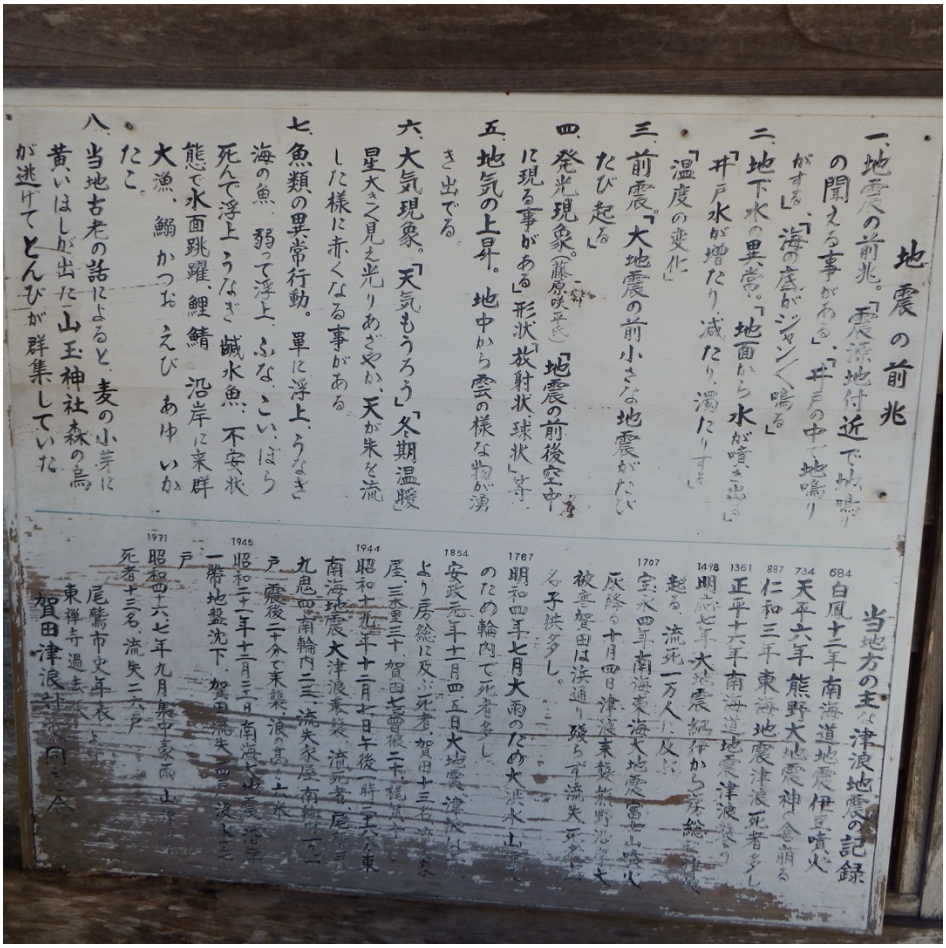
第 100 回　ゴジラと震災

ＩＴ生

現在上映中のゴジラ映画が国内外問わず、好評のようだ。

その理由のひとつには、ゴジラが終戦後間もない焼野原の東京を襲うという設定にある。これまでのゴジラ映画のように自衛隊が存在しない時代。日本人に与えられた武器は、武装解除されかかった旧海軍の重巡洋艦（戦艦ではない）、戦時中のブリキのタンクといわれた戦車、漁船とみまがうばかりの機雷掃海艇などでしかない。しかもそれらを動かしているのは、民間人（復員したばかりの旧軍人ら）だけだ。

この映画で思い起こしたのは、昭和２１年の南海地震だ。このゴジラは戦中にも、ある島の神の化身としても登場するから、昭和１９年の東南海地震がそれに該当すると考えてもいいだろう。



三重県尾鷲市賀田に伝わる古代以降の東南海・南海地震に関する伝承

大震災の被害から逃れる術は、家の倒壊、それに伴う火災、津波を避けるしかない。しかも、これらの対策は等身大の人間が行動することでしか奏功しない。未来永劫、よもや、地震を止めたり、被害を免れる〝最新兵器〟などは実現しないのだ。

ゴジラは映画史上に登場以来、人間の核兵器が生み出した不死身の怪獣として描かれる。大震災も地球の活動が止まらない限り、いつでも何度でも襲ってくる。歴代のゴジラは大震災が繰り返し起きる日本にしか登場しない。このことを事実として受け止めない限り「ゴジラ対策」は進まない。

大震災は人間の歴史や都合など関係なく襲ってくる。
あと、数十年以内にも大震災が懸念されている。一方、日本社会は高齢化が進み、活力を失っていく。こうした状況を、今回のゴジラ映画は暗示しているとしか思えないのだ。

（令和 5 年 11 月）